

史料館だより  
第11号  
1988・4・30

編集 大國 正美  
発行 神戸・深江  
生活文化史料館  
〒658 神戸市東灘区深江本町3-5-17  
電話 (078) 45314980

## お手玉遊び

一

手もとに詳しい資料がないのだが、たしか一年前に神戸市に姉妹港オランダのロッテルダムから、遊んでいる子供の像が贈られてきたことがあった。編者注そのマール玉遊びを、多くの人が日本のラムネ玉遊びのようなものだと考えたが、実際は違った遊びだという新聞記事があったように思う。おそらくこれは、日本のお手玉と同じ遊びではないかと、私はふと考えた。

二

小豆を小さな布袋に入れて、男児のジャンプり用よりは幾分大き目に作るお手玉は、昭和三十年代まで、神戸の小学校でも休み時間などに見られたものだが、私は漠然と日本的な遊びだろうと考えていたところ、一九八五年にニュージーランドから来

プラスチック製のナックル・ボーン。五個で一セット。遊び方は日本のお手玉と同じ方法



NZ国立マッセイ大学講師  
神戸深江生活文化史料館理事

田辺眞人

日した友人を連れて、兵庫県香寺町の日本玩具博物館を訪ねた折に、遊べるコーナーにあったお手玉で、オーサーラ、お一つ、お二つ……とやったところ、すぐその友人は同じことをやってみせた。

「ニュージーランドにも、同じ遊びがあります。ただ道具は、羊の前足の指の第三骨（英語で指の骨を指すのは「knuckle bones」）を使うんです。それで、その遊びの名は「KNUCKLE-BONES（拳の骨）」（英語で拳の骨を指すのは「knuckle bones」）。以前は肉屋さん（英語で肉屋を指すのは「meat shop」）に頼んで骨を買ったものですが、今では骨の形にしたプラスチック製のもの（英語でプラスチック製のものを指すのは「plastic」）で遊ぶんです」ということであった。

実際にニュージーランドに来てみると、街のおもちゃ屋でプラスチック製のナックル・ボーンはすぐ入手できた。試みに近所の小学生に使って貰うと、本当に日本のお手玉と同じ遊び方である。

毛羊を飼っていた英国の遊びであり、このニュージーランドにも英国人が伝えたもので、隣国オーストラリアにも同様に伝えられた。

ところが、調べてみると、おもしろいことがわかった。初めてニュージーランドに來航した英国人ジェームズ・クック船長の報告によると、彼らはニュ

ージーランドのマオリ人の子供たちの遊びの中に、英国のナックル・ボーンと同じものがあるのを見て驚いている。つまり、一七六九年にクック船長の一行が来る前から、マオリ人の中にはアヤトリやバトン遊びと共に、ナックル・ボーンつまり日本のお手玉と同様の遊びが伝承されていた。ただ、その呼称は *Koruru* （英語でクールの呼称は「koruru」） といひ、丸いすべすべした小石を使うのである。今日でも地方の、伝統的生活を続けているマオリ人は、小石で遊んでいる。

三

一九八八年二月にニュージーランドの夏休みを利用して帰国した私は、明石市教育委員会から留学生



マーブリング・キッズ像

**Action 1:** Hold five bones in the palm of your hand – A, B, C, D, E. Throw up all five bones at once just high enough to allow time to turn your hand with the palm down and fingers slightly spread, fig. 1, so that you can catch as many bones, as possible on the back of your hand, fig. 2. Throw up those caught on the back of the hand and catch them again in the palm. Put these aside in a little heap, keeping one as a “thrower”, E. Throw up E, pick up one of those not caught on the back of the hand during the first movement, catch the “thrower” as it falls in the same hand. Put the one picked up aside with the heap, keeping E as the “thrower”. Continue throwing up E and picking up any more bones which were not in the heap until they are all in a heap except E. Throw up E, pick up all four (the heap), and catch E. (This last movement will be regarded as “catch of four”.)

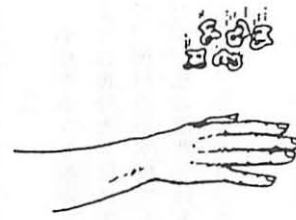


Fig. 1

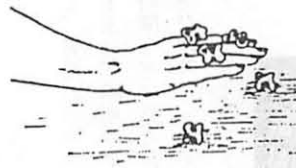


Fig. 2

ニュージーランド教育省カリキュラム開発課編「マオリの遊びと踊り」より

**Action 2:** Five bones in the palm. Scatter the bones from an upturned palm by withdrawing the palm. Pick up “thrower”, E. Throw up E and pick up A, catching E as it falls; put aside A. Repeat picking up B, C, D, in turn until there is a heap consisting of A, B, C, D, then “catch of four”.

**Action 3:** Scatter bones again. Pick up E, throw it up and pick up A and B together, and catch E. Repeat the movement, picking up C and D. Finish with “catch of four”. A continuation of this figure is to scatter as before, throw up E, and pick up A, B, and C all together, and catch E. Repeat movement to pick up D, then “catch of four”. Scatter again and repeat movement by picking up A, B, C, and D, then “catch of four”.

**Action 4:** Five bones in hand. Throw up E, and when it is in the air put down on the ground in one corner of an imaginary square A, B, C, D, and catch E. Throw up E and pick up B, C, D, and catch E. This leaves A in one corner of an imaginary square. Throw up E and put down B, C, D in the next corner, and catch E. Throw up E, pick up C and D, leaving B in that corner. Throw up E, put down C and D, in the next corner, and catch E. Throw up E and pick up D, leaving C in the corner. Throw up E and put down D in the last corner, catch E. A, B, C, D, should be in the four corners of a square, fig. 3.

**Action 5:** E in hand, others in corners. Throw up E. Pick up A between the first finger and thumb, fig. 4, catching E at the base of the palm. Throw up A and change E with B but as E is put in the corner of B pick up B with finger and thumb catching A at base of the palm. Continue sequence round the square with each bone in turn.

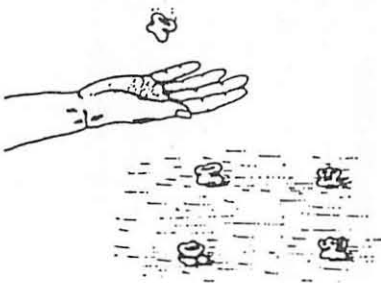


Fig. 3

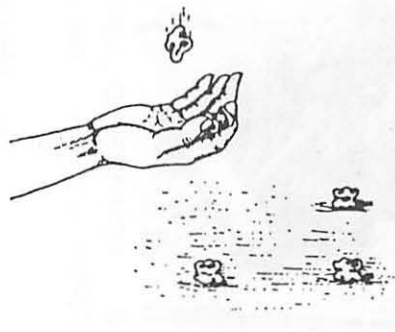


Fig. 4

を話し手にしたフォーラムの司会役を依頼された。同市教委の友人藤井善年氏らの担当する明石中央青年大学という市民講座の一環であるこのフォーラムの当日、私はお手玉を留学生たちにやって見せた。オーストラリア・中国・インドネシア・アメリカからの留学生たちは、一様にそれぞれの国にこの遊びが違った道具で行われていると発言して、参加した明石市の若者に強い印象を残した。中国では日本同様の布の小袋だということであった。

四

お手玉と呼ぶにせよ、ナックル・ボーン、マープル玉遊び、コールルと呼ぶにせよ、一体この遊びは

どこからいつ伝播したものか。東洋に始まったのか、西洋から来たのか。身近な生活の中にある、人類学の研究対象である。

(一九八八・二・二五)

(編者注) この像はマープリング・キッズ像とい、メリケンパークの神戸海洋博物館東南の広場にある神戸港とロツテルダム港の姉妹提携二十周年を記念し、六十二年五月、ロツテルダム港より贈られた。像の説明文には「二人の子供が遊びに興じているピ一玉は、オランダから最初に神戸に伝えられたものです」とある。

## 「近代の着物に見る生活史」によせて

## ―館蔵資料の整理と民俗資料の語ること―

史料館研究員 伊 東 玲 子

館蔵資料の整理を本格的にはじめてはや二年がたった。それまでに深江の深山氏をはじめ多くの方々から寄贈いただいた資料は、約六千点にのぼっていた。当時は、寄贈者名と大まかな分類がやっと分かるというところで、展示がえを行うにもどんなものがどこに収められているのかを、館のスタッフの記憶に頼って行っている状態だった。それが兵庫県博物館協会の研修会や、文献による勉強の積み重ねにより、資料のデータを記載したカード作りに着手できるまでになったのが、二年前のことである。なぜカード作りが大切なのか。博物館の資料は、どこに何があるのかがすぐにわからなくては、研究にも展示にも使えない。郵便番号や住所・名前がわかっているだけでも郵便が各家に届くように、資料も分類番号や名前、収めてある場所をわかるようにしておかなくては、探し出すことができなくなるのである。

まず分類番号の体系は何によるのかを決めるのが問題となった。当館が収蔵している資料は、一般の博物館と違い、生活雑器と呼ぶにふさわしい普段の生活で使われたものを中心。いわゆる美術工芸品といったものはほとんどない。したがって専門書に紹介されている一般の博物館向けの分類方法では、該当する資料が一つもない番号があるかと思うと、もっと細かく分けなくてはならない番号があったり、カバーしきれないのである。この資料は何に分類さ

れるのか、いや何に使われたのかのレベルで論議が分かれるものもあった。

カードの基本と番号のつけ方が決まると、今度は資料一点一点に番号をつけ、痛まないと判断したも のには番号を記入したシールを貼り、写真を撮っていく作業がある。名前と番号の記入されただけのカードでは、それが何を指すのかが具体的にわからな いので、写真が必要になってくる。また同じような形の器が何点もあると、どの写真がどのカードに対応するかわからなくなるので、番号札と一緒に撮り、カードにネガとその札の番号を書き込んで、相互の参照を可能にしておく。シール貼りも時間のかかる作業だった。短冊形に切ったシールに番号を書き、資料に貼ったり、それができない時は資料を箱に入れてそれに貼ったり、といった事を一点一点について行った。

また大きさもまちまちの展示品を並べての展示計画を立てる時のために、カードには物の大きさを記録しておく必要はない。どこを計れば物の大きさを的確に表わすことができるか、物を目の前にして、うなり声も出る。

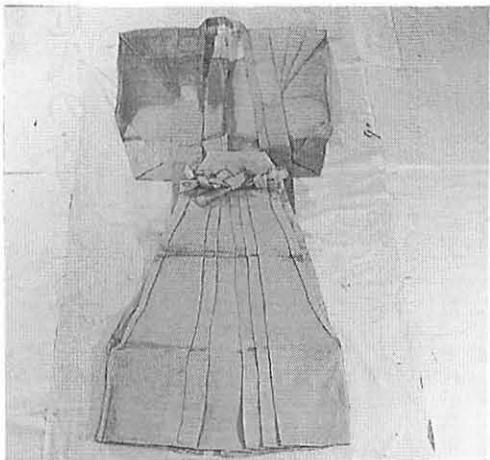
次に問題になったのは、資料を収める場所だった。名前や番号をつけカードを作っても、その資料がどこにあるのかがつかめていなければ何にもならないからである。しかし、大小様々な資料を割りふって

収めるのは難しい事である。膳や碗は重ねるに重ねられず、やつと箱には入れたけれど二度と開けたくないと思うことも。限りある収納場所を効率良く使うにはどうすればよいか、およそ日本中の家庭と同じ悩みが、史料館でも生じたのである。

以上のような作業をくり返すこと二年余、やっとほとんどの資料に名前や番号がつき、カードができた。この作業のおかげで、何の資料がどのくらいあるという、全体の構成もつかめるようになった。

今回特別展として企画した着物展も、これらの中から生まれた。整理の段階でぎつと見積つても三十点が下らないと思われていたから、それなりのまとめができるのではないかと考えたのである。

しかしその成果は簡単には得られそうになかった。展示をご覧いただければわかるように、収蔵品の着物は、今私達が日頃目にしている着物とは少し違つたものばかりなのである。今ではガーゼ地やタオル地の服が変わってしまつて見ることができない乳幼児の着物、お正月や成人の日にだけ見る振袖とは柄も色使いも違う着物達。どう組み合わせるのか、なぜ裾や表地と裏地の間に綿が入つていたりするのか、柄は何と呼べばよいか……。他の収蔵品以上にわからないことはかりからのスタートとなった。しかし幸いなことに調査に加わっていただけの専門家が見つかった。京都府立大学の奥村万亀子先生と奈良女子大学の相川佳子先生である。調査と整理はまず写真の撮影と採寸、収蔵品全体の特徴をつかむことから始まった。そして一通り基礎データが揃つたところで、一点一点の着物に名前をつけて行った。その過程で、色々なことがわかってきた。例え



葬儀用白袴

ば私達スタッフが何だろう？と首をかしげた白の袴は、実はお葬式で喪主、またはそれに準ずる人が着た喪服と分かる、ということもあった。

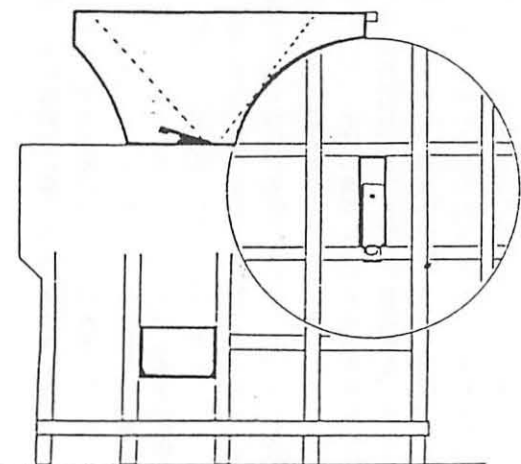
一年半に及ぶ整理の結果、衣料資料の収蔵品は着物五十五点・帯八点・医療用衣服を含むその他の資料十一点という構成であることが明確になった。それらのなかには、ロシア語のスタンブの押された手術用の白衣（往診時に着たとと思われる男物の被布（コート）など医療の方面から見ても興味深いものがある。また五十五点の着物のうち、肌に最も近い着物である襦袢と、上衣と襦袢の間に着る間着が3割を占め、組になるはずの上衣がないというコレクション上の特徴があることが分かった。寄贈いただいた深山氏によると、終戦後食糧を得るために上衣を売ったからだといひ、思わぬところに戦争の跡を見た思いがした。このように一見単なる古着と思える衣料のうちにも様々な大史がある。この他にも、生ま



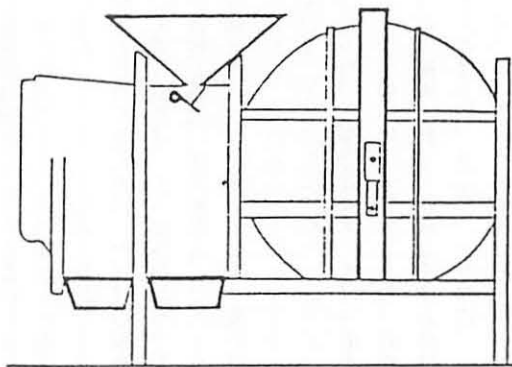
紅地匹田文様縮緬入れ産衣

れたばかりの子供が着たと思われる紅地匹田文様縮緬入れ産衣には、内側に波のようなしわがたくさん残っていた。これは子供が足をバタバタと動かして、蹴つてできた生活の跡なのである。

民俗資料が意味を持つのは、こういった事を資料が語った時だろう。使った人の生き方、その背景となった時代のあり方といったものは、残された道具や衣服に確実にしるされていく。今後も継続されていく整理や調査によって、それは次第に明らかになっていくと思う。当館に展示されているような資料を使ったこと、いや見たこともなかったという方々は、展示品から使われていた時代のことを考えてみて欲しい。使ったことがあるという方々はその思い出を私達に教えていただきたい。より多くのことを資料が語れるように。そして書物に書かれた歴史だけでなく、目の前にある物との対話を通して歴史を感じるという事も、大切だと思うのである。



東日本の特色を示す唐箕(模式図)



西日本の特色を示す唐箕(模式図)

図 1

# 史料館所蔵の唐箕について

史料館研究員 望月友二

はじめに

史料館には、日本人が日常生活の必要さから、技術的に作り出した民具が数多く収蔵されている。しかしこれらの民具をただ収蔵して展示するだけでなく、その製作技術・機能などの研究を進めることが我々にとっては必要なのではないだろうか。それらの民具研究により、民具そのものの特徴だけでなく、その根本にある、日本人の生活文化の構造や体系を追究することが出来るのではないかと考える。

そこで本稿では、史料館所蔵の唐箕を取り上げ、その機能などを追究し、その形態の特色を見ると共に、唐箕に書かれてある紀年銘から、流通形態についても考察し、人々の生活に民具(唐箕)が、どのような影響を及ぼしたかについて探っていききたい。

## (1) 概念

まず唐箕とは何であるかについてだが、わかり易く解説してあるのが、『日本民俗事典』の説明で、それには「風力を利用して、穀物の精粒とくず・わらなどのゴミとを選び分ける農機具。箕と同じ仕事だが、能率よく機械化されているので唐箕という」と記されている<sup>(注1)</sup>。穀粒を選別する農具には、穀物の比重によって風選するものと、穀物の大きさによるものの二つに分けることが出来るが、箕や唐箕等が前者にあたり、千石とおし・万石とおしが後者にあた

る。使用方法は唐箕の上の漏斗部に穀物を流し込み、正面の右についている翼車の把手を回すことによつて風を起こし、第一の口(重い精粒)、第二の口(軽いくず粒)、第三の口(ちり)などへそれぞれ落ちる。作業は一人が翼車を回し、一人が穀物を流し込んで作業をおこなう。翼車回しは難しい作業なので、年配者が行なったという。

唐箕はその名が示すとおり、中国から江戸時代(元禄期)に伝わったもので、農家にとってはそれまで使用していた箕より進歩し、重宝された民具であった。

## (2) 特色

唐箕の形態は大別すると、東日本型と西日本型の二種類になる(図1)。その違いとしては、東日本型が漏斗部と本体とが一体になっているのに対して、西日本型のは、漏斗部が取り外し自由になっていること。東日本型が穀物の吹き出す一番口が正面側に、二番口が裏側についているのに対し、西日本型は両方の口とも正面側についている。そして東日本型が正面側から見た形として、正方形に近いのに対し、西日本型は、横が縦より約一・三倍ぐらい長く、長方形の形をしていることなど、その他にも多くの相違点がある。史料館所蔵の唐箕も、図2を見てわかるように、西日本型の特徴を兼ね備えている。特に

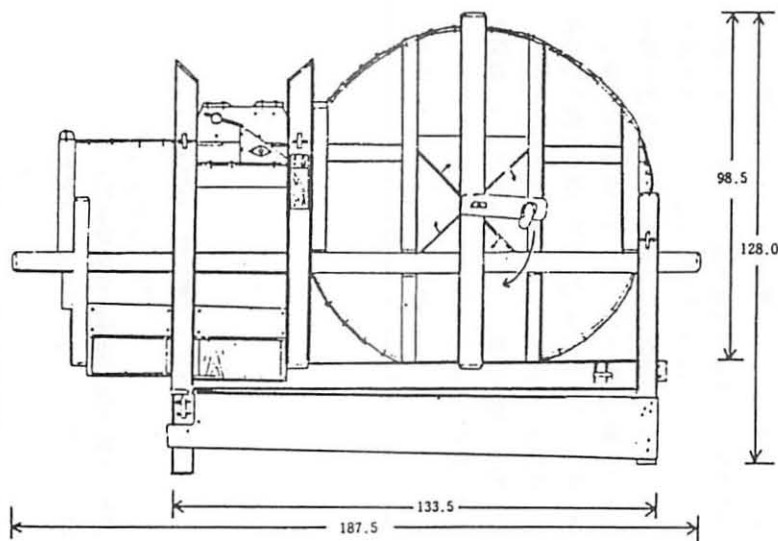


図2 史料館所蔵の唐箕正面図  
 左上の漏斗部が欠けており、把手がついている柱のところに「大阪農人橋式」<sup>(注2)</sup>「屋治兵衛」の墨書がある。唐箕の中ではかなり大型の部類に入る(図1参照)。「芦屋の生活文化史」(芦屋市教育委員会発行。一九七九)より転載。



漏斗部が欠けている点については、西日本型のものは、取り外しが自由だったため、寄贈者の佐久間武一氏の話によると、運搬中に落としてこわしてしまっただけではないかという。

そして西日本型のものだという決定的な証拠には把手がついている柱のところに、「大阪農人橋式□□<sup>下田</sup>□□<sup>上田</sup>屋治兵衛」という墨で書かれた銘がはいっていることである。大阪農人橋には京屋という、農具

などを製造販売していた店が、江戸時代中頃から大正時代末期まで存在していた。<sup>注2)</sup>

『東区史・経済編』の中でも「明治初年の頃には、農人橋二丁目京屋七兵衛・同清兵衛・同治兵衛・又農人橋詰町に京屋太兵衛等の商舗があった。」と記されている。<sup>注3)</sup>このように史料館所蔵の唐箕は、大阪農人橋の京屋で製造された西日本型の特色を持った唐箕だということが以上のことから考証される。

(つづく)

昨年春、史料館で企画した小さな特別展「郷土玩具にみる生活文化史」が縁で、先日、思わぬ来訪を受けた。豊中市教育委員会の藤川永子さんである。

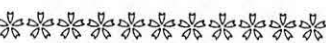
私が大学卒業後も参加し続けている研究室の古文書合宿で知り合った人で、現在は文化財担当の嘱託職員をしている、という。

この特別展は、田辺真人前館長が文部省の交換教師として、一年間ニュージーランドに派遣された後、残されたスタッフで取り組んだ初企画だった。

その概要と狙いについては、本誌九号に、道谷卓研究員が詳しい原稿を載せている。私達がこの特別展を通じて訴えたかったのは、郷土玩具は単なるおもちゃではない、ということだった。民俗行事をモチーフにしたもの、宗教と結びついたもの、畜産奨励など江戸時代の藩政策を象徴したもの、木工集団「木地師」や「鍛冶屋」など、ある時代、社会的に重要な役割を果たしながら、長い歴史の波にもまれ泡の如く消え去った人々の足跡……。そんな歴史と民

俗の息吹が、一つ一つの作品の中に生きている。それを伝えたかったのである。

豊中市教委は、コレクターからの寄贈で、約四千



## —史料館からの手紙—

# 文化財としての郷土玩具



点の郷土玩具を所蔵しているという。藤川さんが担当するのは、考古学遺物を除く文化財全般の整理だが、郷土玩具を調べるうちに、そのおもしろさに

注(1) 大塚民俗学会編『日本民俗事典』、一九七二年

(2) 芳井敬郎「農具商についての民具論的考察」『日本常民文化研究所調査報告』第八集、一九八一年

(3) 『東区史 経済編』 一九四二年

めり込んだ、そう言うのである。

二人で、そんな話をしているうちに、私達の考えが間違っていなかったことに、改めて喜びを感じた。

しかし、これまで郷土玩具の研究は、美術家、収集家の立場から専ら行われ、文化財としての地位を十分確立するに至っていないのも事実。藤川さんが来館したのも、そんなギャップの中で、自分の考えを確かめたいと思ったからようだった。

藤川さんと意見の一致を喜ぶと同時に、郷土玩具を文化財としてとらえる姿勢の乏しき、歴史学、民俗学の立場からの再検討の必要を痛感せざるを得なかった。

一つの小さな展示が、広がりをもった。その事実をまず喜びたい。そして、郷土玩具の文化財としての地位確立を、改めて強調したい。そして、いずれ、第二弾の郷土玩具展も、と秘かに思っている。

(館長代行 大國正美)

# 史料館所蔵の「寛永通宝」について

史料館研究員 道谷 卓

## 一

「寛永通宝」は寛永三年(一六二六)、水戸の佐藤新助によって造られたのが始まりと言われている。但し、これは幕府発行の「寛永通宝」の先駆的意義をもつものではあったが、性格的には水戸藩の私鑄銭とでも言うべきものであった。

幕府が公鑄銭としての「寛永通宝」を発行したのは寛永十三年(一六三六)のことである。以後、幕府は明治初期までの約二四〇年間に全国に錢座(一六三六年、幕府が銀座年寄秋田宗吾に命じ江戸・芝・近江坂本に錢貨の鑄造発行のために設けたのがはじまり)を設け「寛永通宝」を鑄造し、一般庶民の錢貨として親しまれてきたのである。といっても、我々には時代劇の「銭形平次」で使われている古銭と言ったほうがおなじみであろう。

当初は錢貨に鑄造した年の年号を記入していたが、後に幕府は鑄造した年の年号にかかわりなく「寛永通宝」という四字の錢文を使用し(従って、江戸時代の錢貨は宝永通宝・天保通宝・文久永宝以外は全て寛永通宝である)、長期にわたり鑄造されていたため、その種類は数百種に及ぶと言われている。

尚、現在、古銭家の間では「寛永通宝」を鑄造技術の上から二つに分類し、錫母錢(すずぼせん)を用いて、母錢(鑄型のこと)の書体を通用錢にそのまま伝えることができるようになって以後のものを

「新寛永」といい、それ以前のものを「古寛永」と呼んでいる。

## 二

次に「古寛永」と「新寛永」について見てみよう。  
(1)「古寛永」について

「古寛永」は寛文八年(一六六八)に、後述する文錢の鑄造が始まる以前、日本各地において鑄造された「寛永通宝」に対する総称である。これには江戸の芝・浅草、近江の坂本、仙台、吉田、松本、高田、岡山、萩、竹田、井之宮、京都の建仁寺、駿河の沓谷、江戸の鳥越などの地で鑄造された貨幣がある。もともとは江戸の芝と近江の坂本の二カ所だけで鑄造されていたのであるが、幕府が「寛永通宝」を全国に流通させようと考えたため前記のような全国各地に鑄造所を作ったというわけである。

(2)「新寛永」について

「新寛永」は寛文八年(一六六八)江戸の亀戸村で幕府直轄によって鑄造されたのが始まりである。この最初の「新寛永」は「文錢」と言い、これは寛文年代にできたことを示すために錢の背面にある内郭の上に「文」の一字が鑄込まれていることからきている。この「文錢」については新井白石の『折たく柴の記』にも「寛文の時、凡十六年の間、百九十七万貫の錢を鑄出せり」と記されており、この時期

※史料館「寛永通宝」所蔵リスト

名 称	年代(西暦)	枚数	鑄造場所
(古寛永)浅草錢	寛永13年(1636)	1	江戸浅草
(新寛永)島屋文	寛文8年(1668)	2	江戸亀戸村
( // )正字文	// //	2	//
( // )延宝期鑄造錢	延宝元年(1673)	2	//
( // )四ツ宝錢(広永)	宝永5年(1708)	3	//
( // )丸屋錢	正徳4年(1714)	1	//
( // )享保期(背広佐)	享保2年(1717)	1	越後国佐渡郡相川
( // )京都七条錢(退永)	享保11年(1726)	1	京都七条
( // )虎ノ尾小字(十万坪)	元文元年(1736)	1	江戸深川十万坪
( // )細字背元(大坂)	寛保元年(1741)	2	大坂高津新地
( // )正字11波(四文錢)	明和6年(1769)	5	江戸深川千田新田

に非常に多くの錢貨を増鑄したことがうかがえる。しかし、江戸時代も中期以後になると素材の不足から鉄で造った鉄一文錢や、明和期（一七六四〜一七七二）には一文錢よりひと回り大きい、背に波型のある四文錢（一枚で四文に通用）が登場したのであった。このような「新寛永」はその後、明治二年（一八六九）までの二百年間、庶民の錢貨として親しまれ、日本各地で造られ使用されたのである。

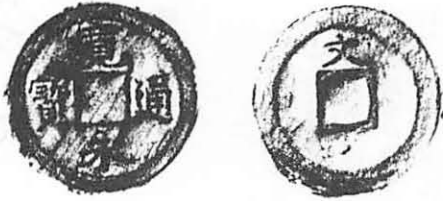
三

さて、数百種と言われる「寛永通宝」の中で、史料館には合計二十一枚の「寛永通宝」が所蔵されている。これらの「寛永通宝」を芦屋市教育委員会の岩本昌三氏に御協力いただき、種類の選別をしていただいたところ、十一種類の「寛永通宝」に分類できることがわかった。その内わけは「古寛永」が一種一枚、「新寛永」が十種二十枚であり、「新寛永」の中には四文錢が一種五枚含まれている。（詳しくは前頁の史料館「寛永通宝」所蔵リストを参照）

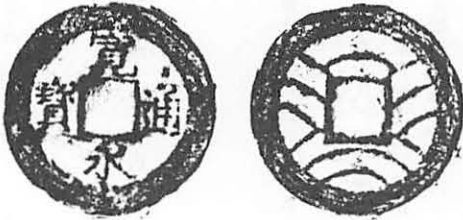
中でも目をひくものは「新寛永」のうち、通称「島屋文」といわれる「寛永通宝」である。これは寛文八年（一六六八）、江戸亀戸村で鑄造された、錢の背面に「文」という字がある「文錢」で、この「文」という字の字体が「島屋文」という俗称で呼ばれているものである。この「島屋文」の「寛永通宝」は現存する数が少ないためか、古銭家の間では非常に高額な値がつけられており、貴重な資料と言えよう。数百種ある「寛永通宝」のうち、わずか十一種、二十一枚のそれではあるが、その一枚一枚にはそれぞれ違った趣きがあり、当時それを使った人々のぬ

くもりが時代を越えて今ここによりみかえるようである。

「寛永通宝」のほかにも多くの貨幣資料が史料館に所蔵されているが、それらについても次の機会に紹介してみたいと思う。



寛永通宝「島屋文」寛文8年(1668)



寛永通宝「当四銭正字(11波)」明和6年(1769)これ一枚で通常の寛永通宝4枚に相当

取り扱い書籍

- 本庄村史資料編第一巻 近世土地制度史料 一〇〇〇円
- 本庄村史資料編第二巻 近世農政民政史料 一〇〇〇円
- 神戸の歴史ノート 二五〇円
- 東灘歴史散歩 三〇〇円
- 神戸の歴史探検 九八〇円
- 神戸の伝説散歩 八八〇円
- 魚屋道の往来 一〇〇円
- 魚屋道マップ 一〇円
- 赤い砂漠と青い海 二〇〇円
- 兵庫の街道いまむかし 一〇〇〇円
- 兵庫の伝説第一集 一〇〇〇円
- 兵庫の伝説第二集 二二〇〇円
- 鎖国前夜の海外見である記 六五〇円
- 道 ―旧加古郡の道標集― 五〇〇円
- 鹿児 一九八三・九月〜八四・八月合冊本 二五〇〇円
- 鹿児 創刊百号記念 八〇〇円
- 灘・神戸地方史の研究 七〇〇〇円
- 兵庫の博物館 一〇〇〇円
- 史料館オリジナルグッズ
- 史料館Tシャツ(M・L寸) 一二〇〇円
- 史料館バッジ 二五〇円
- 魚屋道通行手形 三五〇円



# 摂津の考古学からみた東灘(三)

芦屋市教育委員会 森岡秀人

東灘区の周辺で、発掘調査という科学的手段が用いられて実情の知られてきた縄文遺跡の嚆矢といえ、誰もが芦屋の朝日ヶ丘遺跡をあげることだろう。しかし、この遺跡は長い研究史があるにもかかわらず、意外とその性格はわかっていないのである。今回はこの遺跡を紹介し、私なりに問題点のいくつかを整理しておくと思う。

## 朝日ヶ丘遺跡(芦屋市朝日ヶ丘町)

芦屋市の東部、六甲山地南麓の六麓荘台地の西端から南方沖積平野に向けて派出する朝日ヶ丘尾根の前面洪積台地上に立地する。標高は五〇メートル前後、南西方への見晴らしが良好で、現在は林立する芦屋で有数のマンション群をながめることができる。

この遺跡は、一九六四年の早春、市立芦屋病院に至る道路の造成工事中、一点の黒っぽい土器片を採集した県立芦屋高校の一生徒によって発見された。発見者の佐々木幸雄氏は私が高校時代入部していた史学研究部の五年程先輩であり、現在は一流会社のエンジニアとなって海外で活躍しているらしく、考古学からはすっかり遠ざかっておられるが、当時は芦の芽グループきっての考古少年で、この遺跡をみつけた時もおそらく彼独特の直観力が働いたに違いない。

当時、採集された黒っぽい土器のいくつかは藤川

祐作氏宅に届けられたという。弥生土器とは全く異なる色調・器質の土器を一見して、これは古いものだろうと藤川氏も推察し、同年四・五月、村川行弘氏が担当者となって緊急発掘調査が行われている。調査の機会も増えた現在、この発掘を第一次調査と呼んでいる。

第一次調査は、道路面の整地や側溝構築時の応急的な発掘であったため、南北わずか三〇メートル限定された地域を調べたにすぎないが、この時、縄文前期土器の単純包含層が確認されている。発掘区はA、Dの四ブロックに分けられ、B地区では表土(耕土)・粘土層・砂質土層・灰褐色粘土層・褐色粘土層・砂質土層・鉄分含侵層が約一・五メートル堆積し、その下に厚味約三〇センチの縄文土器包含層がとらえられたのである。

包含層直下の地山面には堅くしまった加工面があり、ピットが密集している。地山より一段高いベツドの上に深さ約三〇センチの堅穴を穿ち、床面としていたようで、隅丸方形部を有することもあって、一応住居址状の生活址と推定されている。この遺構からは、三個体分の土器も出土している。

D地区でも最下層におびただしい打製石鏃を伴う縄文前期土器の包含層が遺存し、石匙・石斧・叩石などの石器も多数検出されている。

遺跡はこの調査後、本格的な発掘調査を経ないまま、周辺で宅地化が進んだ。このままでは遺跡の全容が明るくならないうちに消滅する危険性もある。事態を深刻にとらえた芦の芽グループは、芦屋市に公開質問状を出したり、遺跡保存に向けての要望書を提出した。また、市民集会を開催して、住民運動の高まりを希求した。時は一九七〇年の前後、下火とはいえ、全共同運動、大学闘争の影響もあって、地元の若者たちによる朝日ヶ丘遺跡の保存運動は、今から思えばかなり過激な部分もあった。

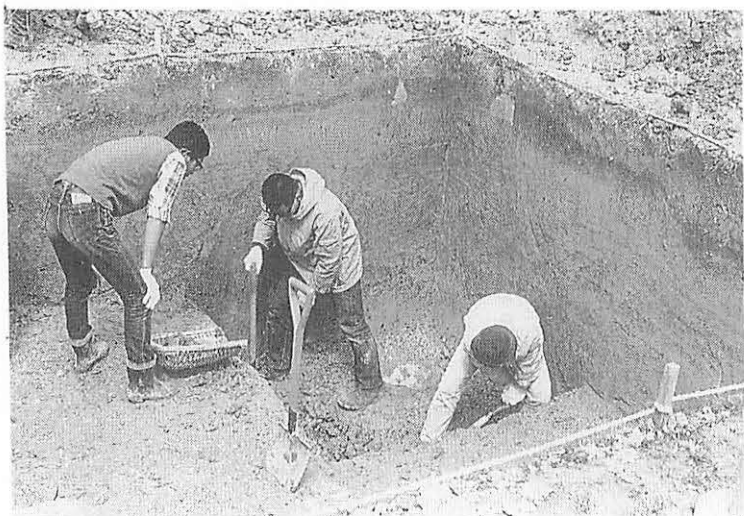
当時、グループ員は朝日ヶ丘遺跡を集落址ととらえ、遺跡範囲の確定、集落構造の実態などを論議し、その頃、縄文集落論に旋風をまき起していた水野正好氏の二棟三単位の構造論などに強い関心を示していたように記憶する。しかし、朝日ヶ丘遺跡で唯一検出された住居址状の遺構のみでは、資料不足は否めず、行政も保存運動側も実態抜きの机上の空論に走る怖れもあった。

そのような状況の下、市関係者の尽力もあって遺跡の概要部が公共用地として取得され、一九七三年には、国庫補助事業による範囲確認調査が実施された。この調査は今ほ亡き藤井祐介氏が担当した。縄文土器研究の権威山内清男博士に師事して、関東地方で縄文時代や旧石器時代の研究を専攻した氏の能力は、関西でも末永雅雄博士の眼にとまるところとなり、難しい朝日ヶ丘遺跡での本領発揮が期待されただ。

調査はとくに東西への遺跡の広がりを把握することに重点が置かれ、東側に三トレンチ一発掘区が、西側に八トレンチ二七発掘区が設定されている。その結果、W・X区と呼称された特定の発掘域に遺物

集中地点が認められたが、層序的に石器組成が把握できる発掘区は全く存在せず、多量の縄文期石器もその出土状況に安定性を欠いていた。

第二次調査と呼んでいるこの発掘には、学生であった私も何度も現場に足を運び、調査者の藤井氏から発掘の状況を直接教えてもらっている。当時、藤井さんは「なかなかいい石器が出るけど、包含層がボルダー（流石群）で乱され、本体がなかなかつかめない。遺構が残っていないかもしれない」と、もらしていた。ボルダーとは、この遺跡の発掘状況を



1973年の第2次調査風景

調べた地質学者前田保夫氏が三〇万年前ぐらいのものコメントをつけて使われた花崗岩巨石群の乱堆積を指して使われた用語であるが、その後、類似した現象を私も芦屋の多くの発掘現場で確認し、その術語を踏襲している。だが、ボルダーの形成年代を同定することはなかなか難しく、朝日ヶ丘遺跡の場合も前期土器単層との関係がけっして明瞭になっていくわけではない。

第二次調査から三〜四年を経て、遺跡周辺はますます宅地化が進み、市有地約二九五九平方メートルにも保育所建設の話など、公共用地利用の計画が出された。さらに、一九八一年になると、本決まりとなった市

立地区集会所建設に伴う事前調査、関西電力高圧線鉄塔移設工事に伴う事前調査が計画された。

この調査は、旧石器の研究者として世界的にも広く認められている山中一郎氏が担当し、私も調査員として参加した。第三次調査である。

この発掘では、次第に高揚してきた文化財保護運動の総括的意味も兼ね、再度の範囲確認調査と啓発資料抽出のための土壌・花粉など各種理化学分析調査も並行して実施されている。調査地点は市道東側北半の高所部に四か所、西側W・X区東方にグリッド五か所、宮川に近い西半部にトレンチ三本がそれぞれ設定され、初めて原位置論的な発掘が行われた。



遺構検出地点付近にあった記念碑

その結果、道路東側の高位部では大阪層群の再堆積状況が想定でき、ボルダーの多い西側とは地質的に大きく異なっていることが判明した。ボルダーは西方にいくにしたがい浅い位置となり、現在の道路面あたりが南北方向に微支谷を形成し、遺物の流動がこの浅い谷づたいに顕著であったことを物語っている。R二一区では、上層にあるボルダーからクレインを使って除石し、困難な発掘を進めたことを覚えておられる。この区画からは朝日ヶ丘遺跡で初めて弥生土器片や中世の土釜片が出土し、妙に新鮮な気分に浸ったものである。

発掘深度が増すと、岩塊はさらに大きくなり、山中氏はこれをもって流土堆積の根拠とみなし、旧石器の良好な資料は得られにくいものと判断した。

第二次調査のW・X区に隣接するR二〇区では、八〇〇点にもほる石器遺物が確認され、散布の中心が追証されるとともに、その大部分が縄文文化期のもので考えられた。この発掘区の粒度分析結果は、流れの遅い粒度の密な堆積物の上層にボルダーの層が存在し、それらは明らかに風化し、バイラン土になっ

ている部分もある。

このように、朝日ヶ丘遺跡の旧地形、堆積環境は非常に複雑であり、ために第一〜三次の調査の結果と解釈にも微妙な相違をもたらしている。

次号では、包含層の性格の違い、住居址様の地山整形遺構の評価、出土縄文土器の地域性など、さらに細部にわたって、問題点を整理を加えていきたい。

(つづく)



朝日ヶ丘遺跡の遠景(一九七三年二月、東方より)

## ●スタッフから一言●

★近年の技術革新により、私達の身の回りから、数多くの伝統的な民具が急速に失われつつあります。史料館ではそれらの民具を一つでも、後世に伝えるため、収集に努力を続けています。今後も資料寄贈があればよろしく願います。(Y・M)

★ただいま本庄共同墓地を中心に石造遺品の調査を行なっています。近くにあるお地藏さんなどの石造遺品などのお話ございましたらまたおしえて下さい。(H・M)

★現在、戦争資料及び貨幣の調査及びカード作成の進行中です。尚、当館では戦争資料の中でも、戦時下の生活に関する資料、特に、防空ずきん、国民服、モンペ、千人針、慰問袋などの資料が不足しております。これらの資料をお持ちの方は当館に寄贈いただければ幸いです。(T・M)

★三月初めより図書整理の活動を開始しました。これからがんばりますので宜しくお願いします。(F・A)

★卒業と共に新しい生活が始まり、今、暗中模索の状態です。おちついたら、がんばっていきます。

(Ton・N)

★今年一年間希望大学に余裕で受かるようにがんばります。史料館の方はあんまり来れませんが来年には必ず復帰します。(Y・O)

★前々からやろうとしていた図書の整理をやつと始めました。今年は何か一つ大きな事をやりたいと思っております。(N・A)

# 研修会への館員派遣

- S62. 10. 16  
兵庫県博物館協会 学芸員連絡会議  
学芸員会議の趣旨説明と協議  
見学 特別展「姫路城とその時代」  
(派遣館員 館長代行 大國正美)
- S62. 11. 20  
兵庫県博物館協会第2回研修会  
見学 柿衛文庫「鬼貫に関する常設展」  
伊丹市立博物館「伊丹の自然と歴史」  
額川美術館「装飾と写生」他  
(派遣館員 研究員 道谷卓・望月友二)
- S63. 2. 4  
神戸大学教育学部六甲山総合カリキュラム研究会  
第1回六甲山総合カリキュラム研究発表会  
公開授業「魚屋道を訪ねて」  
「六甲山の生い立ち」  
研究協議  
(派遣館員 研究員 望月友二)
- S63. 2. 18  
昭和62年度博物館資料取扱研修会  
資料の取扱いについて  
講義「資料取扱の基本」木村重圭氏  
(県立歴史博物館学芸課長)  
講義と実習  
「仏像の取扱方」神戸佳文氏  
(県立歴史博物館学芸員)  
「絵画・工芸の取扱方」菅村亨氏  
(県立歴史博物館学芸員)  
「文書の取扱方」松井良祐氏  
(県立歴史博物館学芸員)  
(派遣館員 研究員 道谷卓・望月友二)

# 史料館日誌抄

史料館事務局主事 川口さつき

## S62年

- 10月10日 友の会 第43回例会  
第5回魚屋道を歩く会 (参加者 82名)  
日本ボーイスカウト第65団カブスカウト (見学者 18名)
- 23日 小野柄小学校3年生 (見学者 26名)
- 11月3日 友の会 第44回例会 (参加者 26名)  
62年度神戸史学会賞授賞式  
記念講演「兵庫の庭園」西 桂氏
- 12月6日 友の会 第45回例会 (参加者 60名)  
故若林泰氏著作集出版記念シンポジウム  
講演「歴史学とジャーナリズム」有井基氏  
「兵庫県下の近世史研究と若林氏」八木哲浩氏  
「経済史研究と藩札」作道洋太郎氏  
「弥生時代高地性集落と伯母野山遺跡」森岡秀人氏

## S63年

- 1月17日 友の会 第46回例会 (参加者 35名)  
史学会 第24回例会  
「葦合村の成立と幕藩制下の地域構造」大國正美氏  
「石作と石宝殿について」北垣聡一郎氏
- 22日 魚崎小学校3年生 (見学者 248名)
- 23日 本山南小学校3年生 (見学者 101名)
- 26日 東灘小学校3年生 (見学者 218名)
- 2月5日 本庄小学校3年生 (見学者 215名)
- 6日 本山第3小学校3年生 (見学者198名)
- 7日 友の会 第47回例会 (参加者 105名)  
バスツアー「聖徳太子の里を訪ねる」
- 11日 友の会 第48回例会 (参加者 38名)  
史料館開設7周年記念・友の会総会  
講演「ニュージーランドと日本との交渉史序説」田辺真人氏
- 20日 福池小学校3年生 (見学者 146名)

# 資料寄贈者ご芳名 (八)

昭和62年9月以降

敬称略

大國正美・書籍/伊東玲子・書籍/柏原正民・書籍/花谷寛・電気のカサ/望月浩・紙幣5点/杉浦和芳・書籍95点/西尾公一・書籍16点/宝塚市教育委員会・書籍4点/尼崎市立地域研究史料館・書

籍/淡路文化史料館・書籍/永井久美男・書籍6点/矢島文子・防空ずきん/宮脇はつ・遺族国庫債券他2点/赤松恒廣・古川柳うたひかるた/藤原徹也・五右衛門風呂/小野朝雄・易经2冊/今林澄子・書籍/寺本きぬゑ・絵ハガキ



友の会幹事										調査員										館長代行										理事										史料館員・役員										協力団体																																																																																																																			
納多	佐原	大川	磯辺	門前	志井	柏原	山本	道谷	田部	庵前	研究員	主任	事務局	館長	松尾	杉浦	志井	小嶋	大國	磯辺	大田	信三	神戸市教育委員会	神戸市観光課	多田	康治	浩平	信三	喜康	保治	正民	文雄	卓	美知雄	尚子	福子	望月	伊東	赤松	望月	川口	大國	深山	田辺	志井	坂上	大田	信三	東灘区役所	神戸史学会	春雄	清野	佐野	(以上兼任)	寺岡	小嶋	西村	大塚	望月	藤川	伊東	赤松	望月	川口	大國	深山	田辺	志井	坂上	大田	信三	神戸市立森林植物園	神戸市立文学館	田辺	清水	佐野	(以上兼任)	寺岡	小嶋	西村	大塚	望月	藤川	伊東	赤松	望月	川口	大國	深山	田辺	志井	坂上	大田	信三	神戸市立天文科学館	サンテレビ	光	久雄	未夫	(以上兼任)	寺岡	小嶋	西村	大塚	望月	藤川	伊東	赤松	望月	川口	大國	深山	田辺	志井	坂上	大田	信三	神戸華僑歴史博物館	大丸百貨店	光	久雄	未夫	(以上兼任)	寺岡	小嶋	西村	大塚	望月	藤川	伊東	赤松	望月	川口	大國	深山	田辺	志井	坂上	大田	信三	神戸共同印刷(株)	御影高校地歴部	光	久雄	未夫	(以上兼任)	寺岡	小嶋	西村	大塚	望月	藤川	伊東	赤松	望月	川口	大國	深山	田辺	志井	坂上	大田	信三	深江少年協議会	深江シヨッピンングセンター